

日本キリスト改革派 灘教会
2023年10月29日（日）・宗教改革記念講演会

「牧会的ケアへの忠実さと伝道に対する熱意
現代の牧師がマルティン・ブツァーとジャン・カルヴァンから学べること」

ステファン・ファン・デア・ヴァット

- I. はじめに
- II. 見逃されてきた側面：牧師としてのカルヴァンとブツァー
- III. マルティン・ブツァーとジャン・カルヴァンを結びつけるもの
- IV. マルティン・ブツァーについて
- V. カルヴァンに対するブツァーの決定的な影響
- VI. 牧師としてのカルヴァンに対するバランスのとれた見方
- VII. キリストとの結合の中で神に深く信頼する生き方（敬虔）
- VIII. 困難の中で憐れみと献身を示す
- IX. ブツァーとカルヴァンが共有した宣教への熱意
- X. 最後に

I. はじめに

今日、西洋世界には、牧会神学や牧会ケアについてありとあらゆる定義が存在しているが、それはほとんど心理学をベースとしたものであって、神学の前提に立っていないものが多い。改革派神学の見地からすると、牧会ケアについての使命感の高まりは、近年の心理学の流行に端を発しているのではない。牧師たちは、この世的な前提のもとでケアを行うのでも、ケアというものを霊的な言葉でキリスト教化しようとしているのでもない。そうではなく、真実の牧会的宣教というものは「そのときそのときの状況の中で、復活し今も生きて私たちに治めておられる救い主イエス・キリストなら何をなさっているだろうか」と、牧師が問うところから始まる。

聖書的に健全な牧会神学と切り離された牧会の働きは、機能主義的になり、もっぱらスキルの運用だけになってしまいがちである。そうならないためにひとつの方策があるが、それは軽視されてきた。その方策とは、マルティン・ブツァーやジャン・カルヴァンのような宗教改革者たちによって記された古典における牧会の知恵に堅実に根ざすことである。そこで、この論文では、改革派の牧会神学と牧会ケアの問題を歴史的見地から詳しく調べてみようと思う。はたしてこれらの宗教改革者たちの牧会ケア・牧会的宣教についての献身的アプローチは、現代の私たちの牧会的働きにおける新しい問題を考える上でも、なお示唆に富み、意味があると見なされうるだろうか。これがこの論文を通して答えを得たい問いである。

牧師たちが日々行っている教会の働きは、置かれている文脈が多岐にわたるため、それぞれ異なる。その内容ややり方は、世界ではさらに異なる。例えば南アフリカ・オランダ改革派教会と日本の改革派教会の牧会的働きの任務や課題はかなり違っているだろう。しかしながら、中心的な目的は同じなので

ある。それは魂のケアということである (cura animarumの伝統)¹。魂のケアは、究極的な不安の中で人生の闘いがおこる人たちへのケアに焦点を当てるものである。

教会の実践には、説教や教えること、信者や求道者に福音を説き、意識的にケアをすることなどが含まれる。さまざまな教会の伝統が神学の基礎を形作り、その上に教会の実践が築き上げられてきた。改革派教会の伝統はその流れの一つとなっている。言うまでもないことであるが、16世紀の宗教改革そのものが、改革派教会の教会の実践を最初に形作った最も大切なプロセスだったのである。この論文では、この有名な宗教改革者たちの中に再発見に値するものがあること、実際、彼らが教会の実践に関して大きな貢献をしているという点について再認識したいと思う。

II. 見逃されてきた側面：牧師としてのカルヴァンとブツァー

カルヴァン神学に関する教義学的なテーマについての文献は数多く出版されてきた。それらは、彼の予定論、聖餐論、三位一体論、教会論、終末論的確信といった側面を強調している。さらに社会生活における政治や、芸術、文学、礼拝などの改革へのカルヴァンの影響もよく知られている。このようなトピックは世界中の無限に広がるさまざまな文化的文脈のなかで、それぞれ異なる仕方で解釈され、受け止められている。しかし、大変ユニークな仕方でこれらのテーマが統合されている主要な場はどこにあったかという点、彼の人生の中に、そして牧師としての働きの中に、目に見える形であったのである。皮肉なことに、カルヴァンの教会神学や牧会的実践について書かれた書物の数は非常に少ない。これを見つけ出すことは教会神学の分野にとって、特に改革派の視座から考える場合には急務の現代的課題である²。

牧師たちは今もなお、歴史神学の重要な貢献から多くのことを学ぶことができる³。それは組織神学的・教義学的側面からだけではない。古代教会の指導者たちのことを時代遅れだと主張する人の多くは、古代の人たちの気質がどれほど現代的意味をもち、意義深いものであるかを知ったら驚くだろう。彼らの書き残したもの(書物、説教、手紙、聖書注解など)は、牧師としてまた福音宣教師としての彼らの献身について、どのようなことを明らかにしてくれているだろうか。彼らが牧会に没頭するよう突き動かしていた主な動機は何だったのだろうか。それぞれの文脈の中で、他者の痛みのケアをすることを彼らに促したきっかけは何だったのだろうか。彼らは苦しみの中で、それをどう解釈し、どのように生きたのだろうか? 同じように、私たちは、16世紀の宗教改革者たちの信念や牧会的・宣教的実践からも多くを学ぶことができるのである。

ここからは、ブツァーやカルヴァンの牧師としての純粋な献身、そして宣教への熱心に焦点を当てたい。それは特に、1538年9月から1541年9月までの3年間、いわゆるカルヴァンのシュトラスブルクへの亡命期間に互いに触発されて生じたことである。宗教改革者たちの多大な貢献の中でも、彼らの人間性を理解するという、非常に明白でありながら無視されてきた側面にスポットライトを当ててみたい。そこには、彼らの日々の出来事における行動や、教会員、友人、同僚、その他大勢の文通相手との関係が含まれる。

ブツァーとカルヴァンは、昔から言われているほど厳しい人々ではないと、新しく理解し直すことができると願う。16世紀の実生活の中での彼らの文書や人間関係の中に現れているような形で、彼らの神学的洞察を再評価できないだろうか。そうすればこの宗教改革者たちを、単に歴史的興味の対象とし

¹ John T. McNeill, *A history of the cure of souls* (New York: Harper & Bros, 1951) [邦訳は、マクニール『キリスト教教会の歴史』] 参照。

² Reijer J. De Vries, “Een gemiste kans: pleijdooi voor onderzoek naar Calvijns pastoraat,” *Nederlands Theologisch Tijdschrift* 66, no. 2(2012):105-119 参照。

³ Mark R. McMinn, *Psychology, theology and spirituality in Christian counseling* (Wheaton: Tyndale, 2007), 31 参照。Andrew Purves, *Pastoral Theology in the Classical Tradition* (Louisville: Westminster John Knox, 2001), 76 参照。

てではなく、イエス・キリストの福音を今日の世界に広めるための知恵と洞察の泉として発見することができるだろう。

III. マルティン・ブツァーとジャン・カルヴァンを結びつけるもの

改革派の神学者（や歴史通のキリスト者）の間では、マルティン・ルターとフルドリッヒ・ツヴィングリとジャン・カルヴァンの関係や論争についてよく知られている。とりわけ聖餐や洗礼など、鍵となる問題に関する教理的な違いについては論争があった。16世紀初期の政治的・社会的混乱の最中の出来事である。あまり知られていないことであるが、この3人の宗教改革者の同僚や友人など多くの人間が、これらの論争に決着をつけるために重要な役割を果たした⁴。

マルティン・ブツァー（1491～1551）はそのような宗教改革者の一人であるが、彼は宗教改革時代を語るときにほとんど注目されることがなく、現代への関連性も低いと考えられている。ブツァーを宗教改革者の継子と呼んだり、宗教改革史の脚注に過ぎないなどと言う人や、「忘れられた宗教改革者」と呼ぶ人もいる。ジュネーブの宗教改革記念碑に刻まれる名誉からも漏れている⁵。しかしブツァーは実際のところ、宗教改革の重要な時期における中心人物だったのである⁶。彼はルター、ツヴィングリ、カルヴァンの3者が結びつきを深める上で鍵となる役割を果たした。

ブツァーは、教義的信念の異なるルター派と改革派のより大きな一致のために働いただけではない。実際いろいろな仕方で、18歳年上のブツァーはカルヴァンを同僚として牧会し、友人として助言を与えることにも尽力したのである⁷。それゆえ、カルヴァンの牧会的スキルがいつどこで研ぎ澄まされたのか、指導者は誰だったのかを知りたいなら、シュトラスブルク時代のドイツ人の同僚マルティン・ブツァーが果たした重要な役割を無視することはできない⁸。ブツァーに導かれるなかで、まずカルヴァンは、牧師の働きに召されるとはどういうことなのか、理解を深めた。

⁴ テオドール・ベザ、ハインリヒ・布林ガー、ピエール・ヴィレ、ジューモン・グリユネウス、ウィリアム・ファレル、フィリップ・メランヒトン、ジョン・ノックスなどの名前が思い浮かぶ。特に、カルヴァンとヴィレとファレル（三脚台とも呼ばれていた）との親密な関係は注目すべきである。この三人はしばしば積極的で表現力豊かで心からの文通をしていた。ストーフェールはそれについて次のように記す。「この文通の豊富さは、保管されている手紙の数によって立証されている。1538年8月4日から1564年5月2日までにカルヴァンがファレルに宛てた手紙は163通あり、1537年4月23日から1563年8月1日、またはおそらく、9月2日までにヴィレに宛てた手紙は204通ある。二人友からカルヴァンが受け取った手紙については、その数は322通です。そのうちファレルからのものは、1538年8月8日から1562年8月3日までに137通ある。ヴィレからの残りの185通は、1540年10月22日から1563年7月28日まで一定間隔をおいて書かれている」（リシャール・ストーフェール『人間カルヴァン』森川甫訳 [すぐ書房、1976年]）、68-69頁参照。カルヴァンの友人関係の意義と詳細については、Machiel A. Van den Berg, *Friends of Calvin* (Grand Rapids: Eerdmans, 2009)を見よ。また、*Calvin and his contemporaries: colleagues, friends and conflicts. Papers Presented at the 11th Colloquium of the Calvin Studies Society*. April 24-26, 1997 Louisville Theological Seminary も参照。

⁵ Marc Van Campen, *Martin Bucer: een vergeten reformator (1491-1551)* (Zoetermeer: Uitgeverij Boekencentrum B.V., 1991), 5 参照。Wilhelm Pauck は、次のように断言する。「ブツァーはカルヴァンのついでにしか想起されていない。しかし、彼（ブツァー）はカルヴィニズムの父なのだ」（“Calvin and Butzer,” *The Journal of Religion* 9, no. 2 (1929), 256 頁）。

⁶ Hastings Eells によると、「今日、ブツァーはあまり知られていないが、16世紀前半には、彼はドイツの一番有力かつ影響力の強い牧師として広く知られていた」（“The contributions of Martin Bucer to the Reformation,” *Harvard Theological Review* (1931): 29) 参照。

⁷ 「カルヴァンは年齢の差を無視した」（Willem van 't Spijker, “Calvin's Friendship with Bucer: Did It Make Calvin a Calvinist?,” in *Calvin and his contemporaries: Colleagues, friends and conflicts* [Papers Presented at the 11th Colloquium of the Calvin Studies Society April 24-26, 1997, Louisville Theological Seminary], ed. David Foxgrover [Grand Rapids: CRC Product Services, 1998], 170 参照。

⁸ F. Bruce Gordon は、次のように主張する。「ブツァーはカルヴァンの教会における模範となって、彼の牧師・教師としての形成に偉大な影響を及ぼした」（*Calvin* [Yale University Press, 2009], 54 頁）。さらに、Gordon は、カルヴァンが（1538年の夏までに）遂げたものの中で「死後の高名を保証するものは何一つなかった。他の多くの改革者と同様、波間に消え去ったであろう」と言い切っている（同、85 頁）。

かつてファレルが1536年にジュネーブでカルヴァンにしたように、ブツァーはカルヴァンに、シュトラスブルクで牧師としての働きを続けよと、主の御名によって強く勧めた。『詩編註解』の序文で、カルヴァンもこの点について触れている。

「そのとき、傑出したキリストの僕マルティン・ブツァーが、かつてのファレルと同じような戒告と抗議の言葉を用いて、わたしを他の場所へ呼び戻した。彼がわたしの目の前につきつめたヨナの例にすっかり恐ろしくなって、わたしは教化の務めに従うこととなった」⁹。

数多くの学者が、カルヴァンの神学と実践の展開にブツァーが及ぼした影響について指摘しているが、その多くは、教会組織や教会規程の実際的な事柄に着目したものである。しかしブツァーが広範囲にわたる影響力を持っていたことは、特に改革派の流れをくむ群れ（教会）での礼拝改革で指導的役割を果たしていたことから明らかになっている¹⁰。加えてブツァーは、カルヴァンの聖書解釈者としての素質を形作る上で特に影響を与え、感化し、実際、牧師として成熟させたのである¹¹。

マネッチによると、カルヴァンのシュトラスブルクでの3年間は、「彼の人生の中で最も幸福な時間だったと言える。フランス移民の会衆の牧師として奉仕しながら、大学で聖書釈義を教え、ヨハネによる福音書やパウロ書簡について講義し、『キリスト教綱要』のラテン語版第2版（1539年）やローマ書の聖書註解書（1540年）など、数多くの著作を生み出した」からである¹²。この間カルヴァンは、ブツァーを介して妻イドレット・ド・ビュールと出会い、結婚し、ブツァーの賢明な育成の下、牧師としてのあり方に磨きをかけていく、とても実り多い時を過ごしたのである。

カルヴァン自身、ローマの信徒への手紙の註解書の謝辞の中で、ブツァーの聖書解釈者としての素質に最大限の敬意を払っている。

「この人は、（あなたも御ぞんじのように）深い知識と、多くのことがらにわたる大いなる認識とのみでなく、さらに、精神の緻密さと、おびただしい文献の読破と、その他さまざまの多くの徳とによって、今日ほとんど何びとからも凌駕されず、これと比肩し得る人すらほとんどなく、むしろ、多くの人々をはるかに抜きんでているのでありますが、そのみでなく、現代において、これ以上の入念さをもって聖書解釈にたずさわった人は誰もいない、との讃辞を自らのものとし・独特なものとして持つ人であります」¹³。

しかしながら、カルヴァンは、ブツァーに対する批判を加えることも忘れてはいなかった。

「ブツァーさんの註解は、他の職業に従事している人が短い時間で読むにはあまりにも長すぎるし、下層の人や、ことがらをそれほどまでくわしく考えない人たちが平易に理解するにはあまりにも高度なものであります。というのは、同氏が一つの問題を取り上げはじめるやいなや、それがどの問題であれ、氏の持つ精神の信じられないほどの豊かさから、手もとにあることが続々と持ち出されて、これを押しとどめ・終結させることができないほどだからであります」¹⁴。

カルヴァンの神学的深さ（一般的な意味で）が、彼の同僚であり友人でもあったヨーロッパ中にいる数多くの宗教改革者たちによって形作られ、知識を得ていたことは明らかである。他の信条を持つグル

⁹カルヴァン『詩篇』I（出村彰訳）12頁。ストーフェール『人間カルヴァン』80-81も参照。

¹⁰D. Steven Meyerhoff, "Martin Bucer: Pioneer of Liturgical Reform," *Presbyterian* 17, no. 2(1991) 参照。

¹¹Randall C. Zachman, *John Calvin as Teacher, Pastor, and Theologian* (Grand Rapids: Baker Books, 2006), 28 参照。David J. Engelsma, "Martin Bucer: Reformed pastor of Strasbourg," *Mid-America Journal of Theology* 3, no. 1 (1987), 36も参照。

¹²Scott, M. Manetsch, *Calvin's company of pastors: pastoral care and the emerging Reformed Church, 1536-1609* (Oxford University Press, 2012), 22-23 参照。

¹³カルヴァン『ローマ書』（渡辺信夫訳）7頁。Marijn de Kroon & Willem van 't Spijker. *Martin Bucer (1491-1551): Collected Studies on his Life, Work, Doctrine, and Influence*, ed. Christa Boerke & Jan C. Klok (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2018), 156も参照。

¹⁴カルヴァン『ローマ書』、7頁。

ープの考え方に對抗してのことだった。このように拡大していった影響力についての考察を、この論文で網羅することはできない。ブツァーがカルヴァンに与えた影響のみに着目したいと思う。また同時に、彼らが牧会的実践に関して、使命感溢れる熱意によって活気づけられ、お互いに献身したことにも注目したいと思う。

IV. マルティン・ブツァーについて

マルティン・ブツァーは 1491 年にアルザス（フランスにあるドイツ語圏）の靴屋の息子として生まれ、ドミニコ会の修道士としての訓練を受けた。15 歳で修道会入りを果たしたのは、祖父の励ましによるところが大きいようである¹⁵。ブツァーはドイツで育ち、学び、後にマルティン・ルターの教えに出会って、キリストへと導かれた。ルターの「95 ヶ条の論題」が発表されてから間もない 1518 年には、プロテスタント信仰に加わったと思われる。ブツァーはドミニコ修道会を離脱したことで、プロテスタントの先駆けとなった（1521 年）。彼は後に破門され、当時（1523 年）牧会していたヴィッテンベルクから亡命した¹⁶。そしてその後の人生のほとんど（約 25 年間）を、牧師また社会改革者としてシュトラズブルクで過ごした。ブツァーは、この混乱期中、プロテスタント勢力の政治的擁護者の第一人者であったヘッセン方伯フィリップ 1 世の主たる助言者だった。

デジデリウス・エラスムスの影響で、ブツァーはキリスト教的人文主義の価値を信奉していたので、彼が隣人のニーズに細やかに心を注いだことにも合点がいく。ブツァーは牧師だったとき、その地域の会衆を教え導いていただけではなく、神学校を始めとするキリスト教主義の学校を建て、また、再洗礼派やツヴィングリ派、カトリックやルター派などとの数々の神学的論争にも積極的に関わっていた。彼はこれらのグループに一致をもたらし、「神学や教会の間の違いを埋める」ために、不断の努力をした¹⁷。さらには、数多くの移民を保護し、人生のあらゆる段階にある人々との文通も続けていた。そんな中でも、夫としてまた 13 人の子どもたちの父としての役割も果たした¹⁸。

ブツァーは牧会神学とケアについて、独創性に富んだ著書『*Von der waren Seelsorge und dem rechten Hirtendienst*』を記した¹⁹。1539 年に出版された『魂への真実な癒しと正しい牧者の務めについて』という書物である。その中で彼は「魂のケア」の五重の業について説明している。それは、彼が「キリストの戒規（規律）」と定義して、目的をもって指示しているものである²⁰。すなわち、

キリスト者は皆、親しく、また愛をもって互いを知り、互いを受け入れること。熱心に、また有効に、御子を知る知識と御子への服従において互いを造り上げていくこと。諸教会の教師たちは、大牧者なるキリストが模範を示してくださったように、キリストの羊を個々に知り、配慮し、養うこと²¹。

¹⁵ Machiel A. van den Berg, *Friends of Calvin*, translated by Reinder Bruinsma (Grand Rapids: Eerdmans, 2009), 101 参照。

¹⁶ ブツァーは「ルターの異端を述べ伝えたことと結婚をしたという理由で」ローマ・カトリック教会によって牧会していたヴィッセンボルグから追放された（1522 年に Elizabeth Silbereisen と結婚したことは、改革者たちの間で初めてのケースだった）。Engelsma, “Martin Bucer,” 39 も参照。

¹⁷ De Kroon & Van’ t Spijker, “Martin Bucer,” 15 参照。

¹⁸ Van den Berg, “Friends,” 103 参照。

¹⁹ *Von der waren Seelsorge und dem rechten Hirtendienst* in *Martin Bucers Deutsche Schriften (MBDS)*, Bd 7, 1964, 90-241. 邦訳は、『宗教改革著作集』6 巻所収、南純訳。英訳は、Martin Bucer, *Concerning the true care of souls*, translated by Peter Beale (Edinburgh: Banner of Truth Trust, 2009) 参照。

²⁰ Amy Nelson Burnett, “Church Discipline and Moral Reformation in the Thought of Martin Bucer,” *Sixteenth Century Journal* 22, no. 3(1991)を見よ。Burnettは、ブツァーにとって、教会戒規は個々のキリスト者の敬虔的な成長を養い、信仰共同体を強め、そうして社会のキリスト教的刷新をもたらすためであったと述べる。しかし、ブツァーの意向はいつも歓迎されたわけではなかった。「ブツァーの福音的教会における戒規のシステムの規定は、試されたことによって不十分と見做されたのではなく、むしろ試されないままに不要とされたのだった」（456頁）。

²¹ David F. Wright の “Historical Introduction” からの引用、Bucer, “Concerning,” xvii 参照。

ここには、キリストという大牧者に服従して、自分に委ねられた人々のために行き届いた配慮をするという、ブツァーの心があらわれている。

ブツァーは晩年、シュトラスブルクの臨時議会の不名誉な決定に従って皇帝カール 5 世によってイギリスに追放させられたが（1549 年）、大主教クランマーとプロテスタントの王エドワード 6 世によって迎え入れられた。後年、ブツァーは自身の優れた神学書の一つである『*De Regno Christi*（キリスト王国論）』をエドワード王に謹呈している。これによって、ブツァーはイギリスがキリスト教社会として発展していく術について助言した。そして遂には、人生最後の 3 年間でケンブリッジ大学神学部の欽定教授として過ごしたのである²²。

V. カルヴァンに対するブツァーの決定的な影響

牧会的な意味で、カルヴァンはブツァーを「父」と認めていた²³。とりわけ、ブツァーの友情と父親のような支えは、カルヴァンの教会改革者としての将来のキャリア形成の決定的要因だった。カルヴァンがキリスト教ミニストリーと教会に対する召命感を取り戻す上で、ブツァーは本当に良い支えとなった。カルヴァンが最終的にジュネーブに戻ったとき（1541年9月）、彼は「成熟し、政治的に明敏で、苦悩する教会を導く用意がある」者とされた。このことは、当時の彼の著作を見れば明らかである。カルヴァンは直ちに「神学的確信を明白で組織的な形に翻案する」ことを始めた。『*Ecclesiastical Ordinances*（教会規程）』（1541年11月）や『*Genevan Catechism*（ジュネーブ教会信仰問答）』（1542年）の2つがその例である。これらの文書は、その後2世紀に渡ってジュネーブ教会の礎となった²⁴。

ブツァーはシュトラスブルクにおけるカルヴァンの陰の面も知っていた。しかしながら、カルヴァンがどう振る舞おうと、ブツァーは忠実な友、助言者、そして信仰の父であり続けました。ブツァーはカルヴァンを指導しながら、少なからぬ自由も与えていました。それでカルヴァンはジュネーブでそれまで果たすことのできなかった目標の多くを達成することができたのです。すなわち、聖餐の頻度を増やすこと、教会規律を牧会的に統制すること、そしてブツァーがシュトラスブルクで用いていた礼拝式文をもとに新たな礼拝式文を作ること、などです。ブツァーはカルヴァンに賜物があり敬虔であることも、また、彼が鼻持ちならないほど尊大になるかと思えば自責の念に陥ってどうしようもなくなるというような傾向がたびたびあることも分かっていました。ブツァーは父であり友であって、常に忍耐強く励ましを与えてくれる存在だったのです。カルヴァンをシュトラスブルクに導いたことも、それから後にジュネーブが彼を必要とし、彼もまたその用意が整ったときにジュネーブに帰らせたことにも、ブツァーに先見の明があったと言えるでしょう²⁵。

シュトラスブルクでの宗教改革のみがブツァーの念頭にあったのではなく、もっと広い展望を抱いていたことが明らかになってきた。この点に関して、ブルース・ゴードンの主張はとても重要である。つまり「ブツァーはカルヴァンをその庇護の下に置いて牧師になるよう教えていたが、最終的な目標は宣教師にすることであった。すなわち、カルヴァンはジュネーブに戻り、彼の仕事を再開することになっていたのだ」²⁶。

²² Engelsma, “Martin Bucer,” 39-40 参照。

²³ Van’ t Spijker 1998:169 は違う見解を提供する。「カルヴァンがストラスブルクから去って行って、ブツァーは友人よりも親しくなった。カルヴァンは彼を兄のようにみなして、ずっと義理を感じたのだ」。

²⁴ Manetsch, “Calvin’s Company,” 26 参照。

²⁵ Daniel M. Doriani, “Friends and mentors in the Reformation: Calvin, Farel, and Bucer,” *Presbyterion* 43, no. 2 (2017): 21-22 参照。

²⁶ Gordon, “Calvin,” 86 参照。

VI. 牧師としてのカルヴァンに対するバランスのとれた見方

カルヴァンの死後 450 年以上の間、数々の批評家によって、カルヴァンは冷淡で、猛烈な議論を仕掛ける狂信者、と思われてきた。この歪められた人物像は、今日においてもいろいろななかたちで多分に残ったままである。カルヴァンを理解するのは、本当に困難である。私たちとは時代も住んでいた世界もかけ離れているからというだけでなく、ブーウスマが述べるように、カルヴァンは「一人称をほとんど用いず、用いたとしても、彼が『わたし』と言っているところはしばしば疑わしい」からである²⁷。それゆえ、ブーウスマはカルヴァンの人物について書く時には、多くを書きたくなくなる気持ちを必死で我慢し、簡潔に書くようにしたのである。そしてむしろ、ある人には慕われ、ある人には嫌われるという、彼の複雑な性格を強調することに決めた。

このジュネーブの宗教改革者を過大にも過小にも評価しないように用心すべきだろう²⁸。カルヴァンには実際、弱さと限界があったから、偶像化すべきではない。しかしそれでも、カルヴァンとその生き生きとした人間性から、私たちは今日も多くを学ぶことができる。ブーウスマが結論付けたように、カルヴァンは「人間の状態の機微や矛盾に異様に敏感であり、そのことについて多くを語ることができた。彼はまた、その困難さを独りでうまく処理することもできた」²⁹人だった。この論文では、何よりもまず、カルヴァンが牧師としてどのように振る舞ったのかを明らかにしたいと思う。彼の著書から何がわかるか。彼は実際にどのような牧師であったのかに注目してみる。彼は、死にゆく人たちの苦しみに何も感じない、無神経で近寄り難い独裁者だったのだろうか³⁰。

カルヴァンについてあまり読まれてこなかった文献を注意深く読んでいくと、彼が自分の欠けをよく知りながらも、神の恵みによりキリストに忠実に従って生き、人々に仕えるために最大限に努める人物であったことが明らかになってくる³¹。カルヴァンは、人生の敗北も厳しさも知っていた。彼は後からも述べるように、定住者ではなく亡命者だった。つまり、亡命者として、また巡礼者として、異文化間のストレスを乗り越え、亡命生活を経験しなければならなかったのである³²。経済的に豊かではなかった上に、病気と闘いながら膨大な仕事量をこなさなければならなかった³³。カルヴァンは近い人を失う深い心の痛みを心底味わって知っていた。彼の母親はたった 6 歳の時に亡くなった。後に、彼と妻イドレット・ド・ビュールは幾人かの幼い子どもを失い、底知れない喪失感に苦しんだ³⁴。そしてその

²⁷ William J. Bouwsma, *John Calvin: A Sixteenth-Century Portrait* (New York: Oxford University Press, 1988), 5 参照。

²⁸ ストーフエール『人間カルヴァン』9-30 参照。

²⁹ Bouwsma, “John Calvin,” 234 参照。

³⁰ 「人々は彼をジュネーブの宗教改革者として語ることを好む。しかし、彼をジュネーブの牧師として示す方が、おそらくより正確であろう。なぜなら、カルヴァンは魂の牧師であって、彼の宗教改革の事業は多くの点で彼の牧会活動の結果であり、延長のようなものでしかなかった」と、ジャン・ダニエル・ブノアは書いている。ストーフエール『人間カルヴァン』110 参照。

³¹ 「1564 年 4 月 27 日（死亡 1 ヶ月前）、ジュネーブ市の理事者や市会議員に別れを告げ、『彼が必要としたとき、多くの場所で彼の助言を耐え忍んでくれた』ことを彼らに感謝した。なさねばならぬことをまだなし終えていないならば、『それをなし終える』ようにしてほしいと彼らに頼んだ。『公的にも私的にも、なさねばならぬことと比べてほとんど何もしていない』ことを許してくれるようカルヴァンは彼らに頼んだ。『あまりに激しい彼の感情を耐え忍んで』くれたことを彼らに感謝した。翌日、彼の同僚に別れを告げたとき、彼らに言った。『私は多くの欠陥をもっていました。そうした欠陥にあなたがたは絶えなければならなかった。その上、私がなしてきたすべてのことは何の価値もありません。意地の悪い人々はこの言葉を突いてくるでしょう。しかし、私は、私のなしたすべてのことは何の価値もなかった、そして、私はあわれな被造物ですと、繰り返して言います。しかし、もしも、私が望んでいたことや私が悪徳を嫌っていたことや神への畏敬の念が私の心の中にあつたことを述べるならば、その思いは善良であったのだということが出来るでしょう。そして、私の悪をお許し下さるように、あなたがたにお願いしたいのです』と」ストーフエール『人間カルヴァン』125-126 参照。

³² Herman J. Selderhuis, *John Calvin: a pilgrim's life* (Downers Grove: InterVarsity Press, 2009) を見よ。

³³ 「フランクフルトから帰るやいなや、カルヴァンは金銭に非常に窮した。6 ヶ月以上何ら俸給を受けていなかったの、彼は生活のため蔵書の一部を売らなければならなかった」（ストーフエール『人間カルヴァン』34）参照。

³⁴ Gordon, “Calvin,” 88 参照。

後、最愛の妻に先立たれる経験までした。こんな苦悩と試練の連続の中で、カルヴァンは神の摂理に対する成熟した信仰を示したのだった。

しかし彼は、誰しもそうであるように、依然としてもろい人間だった。フランスの忠実な友人ウィリアム・ファレルに宛てた手紙にこう記している。「悲しみに完全に沈み込んでしまわないように、できるだけ努めている」³⁵と。またスイスの親しい同僚ピエール・ヴィレ宛てには、「妻の死は極めてつらく苦しいが、できる限り悲しみを抑えている。…しかし君もよくよく知っているように、私の心は傷つきやすく、むしろ弱いのだ」と打ち明けている³⁶。カルヴァンは自分自身の悲しみを分かち合おうとし、実際にそうできただけでなく、周りの人々の重荷を担うことにも同じく熱心だった。彼は無数の人々に対して憐れみ深い共感を示してきたのだった。

カルヴァンが、ジュネーブでの牧師としての召しや働きに対して忠実であったことは、近年再注目を集めている³⁷。最近では、カルヴァンの召しの核は牧師になることであり、彼の焦点は「魂の癒し」にあったことを、さまざまな研究者が指摘している。そしてその牧者としてのアイデンティティから、カルヴァンの実り多い神学的実績が生まれ出てきたのである³⁸。それゆえ、カルヴァンが多岐にわたる教会の牧師としての働きに具体的な関わりを持っていたことは、何にもまして自分は牧師だという自己理解に基づいていたからだったと言えるだろう。

カルヴァンが自分の説教や著作、教えを自分の働きの核と見ていたことは、16世紀の教会改革の歴史に軽く目を通しただけでも明らかである。しかしながら、彼が会衆（主にシュトラスブルクのフランス移民）にも社会的地位の高い人々にも共感的関心を寄せて具体的なケアを行っていたことや、彼の牧師への召命感を本質的に形作っていたことについては、あまり知られていない³⁹。彼の著作を通して明らかになってきていることは、カルヴァンが実行した厳しい訓練（ブツァーから多様に学んだこと）は、カルヴァンが示した思いやりと真の共感の前では陰に隠れてしまうということである。カルヴァンはそうする中で、信仰者たちが神を知り、また互いへの愛にはっきりと気づくように導いたのだ⁴⁰。カルヴァンは同胞を熱心にケアしていた！ これは彼についての多くの誤ったイメージを完全に払拭してくれる。

VII. キリストとの結合の中で神に深く信頼する生き方（敬虔）

³⁵ ストーフエール『人間カルヴァン』50 参照。

³⁶ *Letters of John Calvin: Selected from the Bonnet Edition with an introductory biographical sketch* (Edinburgh: Banner of Truth Trust, 2018), 92-93 参照。カルヴァンの友人関係においても同じような共感が見られる。例えば、ジュネーブで同僚と友人となった修道士エリ・コロが死んだとき、カルヴァンは非常に深い悲しみに陥って、ファレルに書いた。「私はあまりにも驚き、苦悩を和らげることができません。昼はどのような仕事にも精神を集中させることができませんし、また、精神がいつも同じ思いで動揺するのを防ぐことができません。昼の非常に悲しい苦悩に読んで、夜にはさらに残酷な責苦がやって参ります」（ストーフエール『人間カルヴァン』66）参照。

³⁷ 特に Manetsch, “Calvin’s Company,” 255-298 を見よ。彼はそこで詳しく、カルヴァンとその同僚の社会的・宗教的な状況に応じて、彼らの土台となった神学と実践的な牧会の業を明らかにしてくれる。

³⁸ Jean-Daniel Benoit, *Calvin als Zielzorger*, Translated by AJA Mondt-Lovinck (Nijkerk: Callenbach, 1974), 14 参照。Benoit は、「キリスト教綱要はただの神学者によって書かれた著書ではなく、牧師になる前に、魂の配慮に捕らえられた人物によって書かれたものだ」と述べる。John H. Leith, “The Ethos of the Reformed Tradition,” in *Major Themes in the Reformed Tradition*, ed. Donald K. McKim (Grand Rapids: Eerdmans, 1992), 15 も参照。

³⁹ 特にエルシー・A・マッキー『牧会者カルヴァン：教えと祈りと励ましの言葉』（出村彰訳）新教出版社、2009年、369-418 参照。マッキーはカルヴァンの病者、あるいは死に直面している者への問安、慰めの手紙、助言と相互の励まし、苦難の中にある者らに対する正義と公平の弁証および牧会的配慮、そしてまた囚人となった人々と彼らの弁護者との交信についてなどの事例を取り上げてくれる。

⁴⁰ カルヴァンの牧会神学者としての思考と実践についてのもっと詳細な記述については、例えば W. Stanford Reid, “John Calvin, Pastoral Theologian,” *The Reformed Theological Review* XLII, no. 3 (1982) を見よ。また、Mark Ryan, “The Pastoral Theology of John Calvin,” *The Burning Bush* 6, no. 1 (2000) も参照。Ryan は、カルヴァンの牧会的ミニストリーの四つの基本的任務について書いている。すなわち、御言葉の説教、会衆への訪問、礼典の正しい執行、そして聖書に基づく戒規である。

ブツァーとカルヴァンの重要な共通点は、キリストと結合されたリアリティである⁴¹。いわゆる「キリストとの神秘的一致」は彼らの神学の核であり、また彼ら個人の信仰の核心でもあった。オランダのブツァー研究者ウィレム・ヴァン・ト・スパイカーは、カルヴァンに対するブツァーの影響力は2つの関連した要因に基づくとして断言する。その2つとは(1)互いへの尊敬の念(2)彼らの神学の核心(聖霊によるキリストとの交わり)である⁴²。そのリアリティとは「カルヴァンにとって、実に御言葉の神秘であり、恩寵の神秘、教会の神秘であった…。このリアリティは、頭ではわからないが経験できるものだ、と彼は言った」⁴³。救いとは、カルヴァンにとって、キリストが共にいてくださるコイノニア(交わり)においてのみ真の実現を見出すことができるものだった⁴⁴。そして、このことをカルヴァンは、指導者であり友であったマルティン・ブツァーから大いに学んだのだった。

カルヴァンの誠実かつ大胆に神に深く信頼する霊性(敬虔)は、彼の教師・説教者・牧師としての献身の思いを養い育てた⁴⁵。宗教改革史の研究者エルシー・アン・マッキーによると、カルヴァンが(数々の試練を通して)神に深く信頼する経験をしたことが、特に神から与えられた牧師への召命と本質的に関係しているとのことである。マッキーは、霊性よりも神への深い信頼という表現をより好んで適切に用いている。カルヴァンの牧会の働きは全て、神によって(あのような試練を与えられることで強えられるようにして)他者のために召し出されたという訴えの表出だと、彼女は説明する。それゆえに、カルヴァンの神への深い信頼という表現には、大胆な牧会的要素があるのである。カルヴァンは牧師として、神との関係についての自分の経験を引き合いに出しながら、御言葉によって造りかえられ神の形に創造された神の民に語るのである⁴⁶。非常に現実的な意味で、彼の思索の文脈はすべて、彼が牧師の働きを追求しつつ忠実に取り組んだ活動にあったのである。

この問題に関連して、ジョエル・ビーキは、カルヴァンが名声を博した学術的に優れた才能を持っていたことと「彼が活気ある霊的また牧会的文脈において神学を書き記した」ことを切り離さないことが重要であると指摘している。キリストとの神秘的結合と心からの祈りの人生にしっかりと錨(いかり)を下ろしたカルヴァンの *pietas* (敬虔)は、彼の教会についての教えや思索の実践的かつ神学的側面に広く強い影響を与えていると、ビーキは説得力を持って主張する⁴⁷。

敬虔(神への深い信頼)についてのカルヴァン自身の定義は、そのまま引用する価値がある。

「私が敬虔と呼ぶのは、神の慈しみについての知識によって成立する敬いに結びついた神への愛のことです。すなわち、神に全てを負っており、父としての御配慮によって養われ、神が一切の善の源であり、そのため神以外の何も求めてはならないということを感じ取るまでは、人が進んで神に服従して身を捧げることは決して起こらないからです。いや、神の内に揺るがぬ幸いがあると確認しない限り、真実にまた全身全霊を傾けて神に身を委ねることは決してない⁴⁸。」

⁴¹ 『綱要』改訳版、邦訳264頁(第3篇14章6節)参照。

⁴² De Kroon & Van 't Spijker, "Martin Bucer," 155参照。「ブツァーとカルヴァンの間に存在した交わり(*communio*)は、彼らが共有したキリストとの交わり(*communio cum Christo*)に即したものでした」。

⁴³ De Kroon & Van 't Spijker, "Martin Bucer," 76参照。

⁴⁴ カルヴァンのキリストとの結合のリアリティについての確信は、キリストにある選び(予定論)に結び付いている。『綱要』改訳版、邦訳264頁(第3篇1章1節)参照。

⁴⁵ Joel R. Beeke, *Piety: The Heartbeat of Reformed Theology* (New Jersey: Westminster Seminary Press, 2015) 参照。Ford L. Battles, "True Piety According to Calvin," in *Interpreting John Calvin*, ed. R. Benedetto (Grand Rapids: Baker Books, 1996), 289-306も参照。

⁴⁶ マッキー『牧会者カルヴァン』320-342参照。

⁴⁷ Joel R. Beeke, "Calvin on Piety," in *The Cambridge Companion to John Calvin*, ed. by Donald C. McKim. (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 125参照。

⁴⁸ 『綱要』改訳版、邦訳43頁(第1篇2章1節)参照。

これはまことに、心（知性ではなく自分の全身全霊）の問題なのである。キリストとの結合にしっかりと錨を下ろした生き方とは、キリスト者が義認（神との和解）と聖化（新生）という二重の恵みを受け取るということである。それが神に深く信頼して生きる生き方（まさに敬虔）である⁴⁹。この生き方は、カルヴァンの“しるし”によく表れている。心を手に持ち、それを神に捧げているのである⁵⁰。

ブツァーにとっても、*pietas*（敬虔）は神学の根本にある概念だった。しかし、カルヴァンとブツァーが強調する側面は異なっている。カルヴァンは神への敬意や神の愛といった古典的な要素を強調している。一方、ブツァーはそれを隣人愛にも関連付けている⁵¹。もう一つブツァーが理想とする真の敬虔の興味深い点は、「信仰と愛の組み合わせに特徴付けられるだけでなく、説得力（*eloquentia*）と知恵・敬虔（*pietas*）との組み合わせによっても特徴付けられる」点である⁵²。それゆえファン・ト・スパイカーはブツァーのローマ書註解書（1536）から要約してこう記している。「神学は、人々が神に深く信頼し、幸せに生きることを教える業です。これは実に困難な業ですが、何よりも難しいのは、まだ肉の身体にありながら、神聖な生活を送るよう学ばなくてはならないからです」⁵³。

神に深く信頼し、幸せに生きるよう人々に教えることは、今日の牧師にも今なお求められている。信者・求道者を問わず、（神に深く信頼して）神に献げる生き方、そしてその結果として豊かに（幸せの）実を結ぶこと（幸福）を教えること。これは、牧会ミニストリーや牧会ケアの不可欠な点である。しかし、牧師たちが人々に教えようとする前に、自分でこの幸せな生き方を具現することが求められているのだろう。

VIII. 困難の中で憐れみと献身を示す

先に述べたブツァーとカルヴァンの神に深く信頼する（敬虔な）生き方、つまり、キリストへの服従、キリストとの結合の中に生きることは、机上の空論ではない。キリスト者は憐れみ深い神の存在を信じると言っているが、人間がこのように苦しむのに神は本当にいるのかと問いたくなるような自らの人生、また社会的混乱の時代の中で、二人はこれを忠実に体現したのである。

ブツァーの牧会ケアは、エゼキエル書 34 章に書かれている牧者像に導かれたものだった。群れを養い、弱ったものを力づけ、傷ついたものを癒し、迷い出たものを連れ戻し、失われたものを訪ね求めるのである⁵⁴。ブツァーの（この真の牧者の福音を伝えたいという）宣教への熱心が、ケアをする牧師と

⁴⁹ 「キリスト者は聖化へと召されているのだから、その全生涯は神を恐れることの瞑想であるべきです（エペソ 1:4、I テサロニケ 4:3）」『綱要』改訳版、邦訳 332 頁（第 3 篇 19 章 2 節）参照。「神を恐れること」というのは敬虔な生き方をほめめかす。英訳では“The whole life of Christians ought to be a kind of aspiration after piety …”

⁵⁰ 1540 年代、カルヴァンは彼の私的な書簡を（JC（John Calvin）というイニシャルと心（臓）を差し出す手の簡単な絵を含んだ）蠟の印章で封印した。同時にこの印はカルヴァンが熱心な敬虔をもって、主を礼拝し、仕える者として自分の心を自由に主に捧げるということを伝えた。これに関連しては、ある出来事がきっかけとなったと思われる。1540 年 10 月にシュトラスブルクから送った手紙の中で、ジュネーブへ再び帰るべきかどうか決めかねていたカルヴァンは、ファレル宛てに次のように書いている。「今、私が考えている手続き問題に関しては、これが私の率直な感想です。すなわち、もしも私が自由に選べるというのなら、あなたの助言に従うことほど私の意に合わないことはないのです。しかし、私は自分が自分のものではないことを知っておりますので、私は自分の心（臓）を、主なる神への犠牲としてお捧げするつもりです」（マッキー『牧会者カルヴァン』74 参照。カルヴァンの印についてのさらなる説明については、以下を参照；calvin.edu/about/history/calvin-seal.html）。

⁵¹ Amy Nelson Burnett, “Review of *Martin Bucer und Johannes Calvin. Reformatorische Perspektiven: Einleitung und Texte*, by Marijn de Kroon,” *The Sixteenth Century Journal* 24, no. 2 (1993): 460 参照。

⁵² De Kroon & Van’ t Spijker, “Martin Bucer,” 55 参照。

⁵³ ブツァーの貢献は、学術と敬虔の相乗効果を強調したことである。Van’ t Spijker によると、これらの発想、つまりブツァーの説得力（*eloquentia*）と敬虔（*pietas*）との連携は「1530 代のシュトラスブルクにぴったりでした」。De Kroon & Van’ t Spijker, “Martin Bucer,” 67 参照。

⁵⁴ このヴィジョンはブツァーの重要な書籍『*Von der waren Seelsorge*』（邦訳は、『宗教改革著作集』6 卷所収、南純訳）に詳細まで記されている。この本は教会形成・教会教育に関して洗練された計画を含んで、最初の福音的牧会論・牧会神学として知られている。Thomas Schirrmacher, *Advocate of Love - Martin Bucer as Theologian and Pastor*, Translated by Richard McClary, ed. Thomas K. Johnson (Bonn, Verlag für Kultur und Wissenschaft Culture and Science Publications, 2013), 34 も参照。

しての彼の働きぶりを特徴づけていた。それは牧会的伝道・伝道的牧会、すなわち牧会ケアを通しての宣教することの、バランスのとれた全体像を形成した。

この牧者像は、カルヴァンがシュトラスブルクで、そして後にジュネーブに戻ったときに、一人一人と牧会的関わりをもつときにも力を与えた。以下の2つの例は、彼の真心からの牧会的な憐れみ、誠実さ、献身ぶりを表している。

- (1) 1538年、カルヴァンがバーゼルに居たときに、ファレルの甥が伝染病に倒れたことを知った。カルヴァンは危険を恐れることなく、自分の責任感のみを念頭に少年の病床に赴き、福音の慰めと励ましとを与えた。かかった費用を負担し、その子が亡くなると埋葬費用も負担したのである。
- (2) ギヨーム・デ・トライが人生の最良の時に家族から切り離されて死を迎えたとき（1561年）、カルヴァンは遺された子どもたちの後見人になることを引き受けた。この重荷が彼の運命に降りかかったとき、カルヴァンはテオドール・ド・ベーズにこう述べている。「彼の子どもたちを自分の子どものように愛することは、素晴らしい友との思い出を思えば当然である。…私に寄せられた信頼を裏切るとは犯罪に等しいであろう」と⁵⁵。

カルヴァンは、信仰者たちに慰めを与える聖書の約束の言葉を信じ、強い信念を持って霊的指導を行った。彼の書簡には、心を乱した信仰者や葛藤する多くの人々（王や王妃も含まれる）に対する、偽りのない温かさをもった共感が表されていた。しかしながら、彼の指導は決して感傷的なものではなかった⁵⁶。カルヴァンが無数の人々に霊的指導を与えていたことを知るには、彼の書簡を見るのが最も良いだろう。それを読むと、病める者や遺族を慰め励ましたり、また死刑囚が福音を信じることができるよう、カルヴァンがどのようにしていたかがわかる⁵⁷。

もう一つ見過ごしてはならない点は、カルヴァンが多くの教義学的課題を牧会ケアの見地から考えていたということである。彼の神論は、神が御言葉と聖霊によってケアし慰めることをはっきり述べている。カルヴァンは、神から逃げて弱く罪深い人間を見る「心理学者」とも呼ばれてきた。それが意味するのは、彼の『キリスト教綱要』が単に素晴らしい神学者による書物ではなく、むしろ、牧師になる前からすでに「魂のため」の関心に捕らわれていた人物による書物だということである⁵⁸。彼が『綱要』を書いた目的は、厳格な教義をまとめることではなく、聖書に基づいて、信仰深く忍耐する人々を励ますことだったのである。

カルヴァンは、実に、羊の群れの羊飼いになるための神学者だった⁵⁹。彼は常に神の憐れみの観点に焦点を合わせていた。神の摂理と人間の苦難を結びつける主なものは、神に対するある特定のイメージ（神をどう理解しているか）である。このイメージが、神を、私たちを守り導き、養う、愛の父という姿に描く。カルヴァンの場合、神は憐れみの神だ、という認識が、自分の牧会において憐れみを表すことの中心をなしていた。これは、十字架の神学に堅く結びついていた⁶⁰。それゆえ、カルヴァンにとっ

⁵⁵ ストーフエール『人間カルヴァン』、111参照。

⁵⁶ Manetsch, "Calvin's Company," 7参照。

⁵⁷ ヨーロッパにいた様々な人々に宛ててカルヴァンが書いた諸々の手紙を参考するには "Letters of John Calvin" を見よ。また、フランスにいた有力な女性たちに宛てて彼が書いた手紙の編著を参考するためには J.C. Van der Does, *Kracht en Troost: brieven van Calvijn aan Vrouwen* (Dordrecht: Uitgeverij J.P. van den Tol, 1980) を見よ。

⁵⁸ Benoit, "Calvijn," 85は次のように主張する、「カルヴァン：神学者であり心理学者；彼は聖書と個人的な経験から『人間の内に存在するもの』を知っていた」と。

⁵⁹ David Willis-Watkins, "Calvin's theology of pastoral care," in *John H. Leith. Davidson, NC: Davidson Colloquium on Calvin Studies VI*. 1992, 137-138を参照。Willis-Watkinsのカルヴァンについての牧会論に関する主張はカルヴァンのヨハネによる福音書10章の注解を踏まえている。

⁶⁰ 『綱要』改訳版、邦訳377頁（第2篇6章1節）：「それゆえ、十字架の宣教は人間の知恵に適合していませんが、一たび背き去った作者また創り主なる神に立ち返ることを願い、また彼が再び我々の父となることを始められるよう願うならば、謙虚にこの宣教を受け入れなければならない」『綱要』改訳版、邦訳188頁（第3篇8章3節）も参照。

て摂理の教理は、教義上の問題であることが主なのではない。それよりも、私たちの日常生活に関わるテーマであり、神の栄光が全ての出来事の究極の目的であることを指し示しているのである⁶¹。

カルヴァンは、神の摂理の教理の観点から人間の苦難を捉えていた。彼は、苦難が信仰者の生き方を変える、と指摘した。苦難によって、私たちは悔い改め、神に信頼する機会が与えられるからである⁶²。カルヴァンは、苦難が信仰者の人生を決定づけるということ、その苦難はキリストの苦難に照らして理解しなければならない、と信じていた⁶³。従って神学的課題としては、悪の問題は、苦しみをどう避けるかではなく、キリストとの結合の中でどう苦しむのかが問題なのだと、カルヴァンは指摘した⁶⁴。移民の教会でヨブについて（159回）説教する中で、カルヴァンは苦難について、冷静で現実的、しかし慰め深い理解を提示した⁶⁵。彼は混沌や不義について異議を唱えることはせず、苦難の現実を受けとめ、なぜそのようなものが存在するのか、詳細な説明を試みた。実際に、彼はすべてうまくゆくというような景気のいい説教をすることはなく、むしろ「カルヴァンが絶えず言い続けたように、信仰や敬虔な心といえども、信仰者が人生の艱難に直面するのを防ぐことはできない」とのことだった⁶⁶。

カルヴァンの苦難に対する牧会的アプローチを学ぶと、ほんとうに苦難が、新しい人生を歩み始めること、新しい目的意識を持つことへと導く、ということがわかる。言い換えれば、苦難は成長の過程、生きる意味を見つける過程とみなすことができるということである。それがもたらす危機に加え、苦難は、神と隣人に対して意味のある奉仕を捧げる機会になり得るのである。それゆえ、ヨブ記についてカルヴァンが書き記したのものには、ある一つのテーマが貫かれている。一般にキリスト教的敬虔の鍵とカルヴァンが見なしているもの、つまり、「主権者・超越者である神への従順」である⁶⁷。最近では、苦悩や困難は、神の人間に対する不当な仕打ちと解釈されるが、この誤った認識は、キリストとの結合において被る苦難である（キリストと共に苦しんでくださる）というカルヴァンの理解によって、否定される。これこそ、21世紀を生きるキリスト者が新たに心に留めるべき重要な考え方である。

IX. ブツァーとカルヴァンが共有した宣教への熱意

ブツァーとカルヴァンの関係性と互いへの影響力の話題に戻る。シュトラスブルクで二人は隣同士に居を構えていたので、庭先で陽気な議論を交わすことが可能だった⁶⁸。二人は牧師として、個人的にも神学的にも、苦楽を共にした。二人ともキリストを中心とすることや聖霊の働きを（神学的に）強調しつつ、隣人愛を大切に生活した生活を両立させていた。この考えが彼らの教会論を形成し、社会的混乱の時代における教会規律の必要性を指摘するに至ったのである。カルヴァンはブツァーのことを、信頼に足るカウンセラー、また父親のような友人だと認めていた。後年、二人は互いの信頼関係のおかげで多く

⁶¹ カルヴァンは『綱要』で、「摂理についての無知が全ての悲惨の極致であり、最高の幸いは摂理を知ることにある」と主張している。『綱要』改訳版、邦訳 248 頁（第 1 篇 17 章 11 節）また、Pieter C. Potgieter, “Perspectives on the doctrine of providence in some of Calvin’s sermons on Job,” *HTS Theologiese Studies/Theological Studies* 54, no. 1/2(1998): 38 も参照。

⁶² また、『綱要』改訳版、邦訳 188 頁（第 3 篇 8 章 3 節）を見よ。

⁶³ Potgieter, “Perspectives,” 47 参照。

⁶⁴ 『綱要』改訳版、邦訳 186-187 頁（第 3 篇 8 章 1 節）：「我々が逆境に苦しめられれば苦しめられるほどキリストと我々との結合がしっかり確認されるとは、十字架のあらゆる厳しさを和らげる上でいかに力になることだろう。彼に与えることによって苦難そのものが我々の祝福となるに留まらず、我々の救いを前進させる上で大きい助けになるのです。」

⁶⁵ Derek Thomas はカルヴァンのヨブ書に関する 159 の説教を深く研究して分析した。彼はカルヴァンの主な見解について次のように主張している。「試練は、私たちが神以外のものに頼ることから遠ざけるためのものです。それらは聖化という目的を果たします。摂理について黙想すると、私たちの心に神に対する畏敬の念と、逆境の中にいる他者への同情がわき上がってきます」（Derek Thomas, *Calvin’s Preaching on Job*, 2017, p.7-8 (<https://www.icrconline.com/library>）。

⁶⁶ マッキー『牧会者カルヴァン』366 参照。

⁶⁷ Derek Thomas, *Calvin’s teaching on Job: proclaiming the incomprehensible God* (Ross-shire, Scotland: Christian Focus Publications, 2004), 17 参照。『綱要』改訳版、邦訳 192 頁（第 3 篇 8 章 8 節）も参照：「もし、悲しみと苦しみに痛めつけられても神の霊的な慰めの内に安らぐならば、その明朗さが輝き出るので。」

⁶⁸ Van den Berg, “Friends,” 100 参照。

のストレスと危機を乗り越えることができた⁶⁹。あまり知られていない事実であるが、カルヴァンが執事職に高い尊敬の念を抱いていたことは、ブツァーの影響によるものである。カルヴァンはブツァーの成熟した指導の下、シュトラスブルクで移民のための牧師をしながら執事的働きについて実践的に学んでいたのである⁷⁰。

ブツァーとカルヴァンの関係性について特筆すべきもう一つの点は、宣教への熱心が共通していたことである。彼らが牧師として行っていたケアには、その背後に真の宣教への熱意という動機があったのである⁷¹。ブツァーが世界宣教を具体的に提唱していたことは、近年、宗教改革研究者によって再認識されてきている。彼は宣教命令に着目していた点で、宗教改革者の中でも傑出していた。ブツァーにとって、シュトラスブルクやヨーロッパのキリスト教国を越えて福音を広めることは、疑いの余地のない明白なことだった。この世界的展望ゆえに、彼は他の宗教改革神学者たちを超えていた。そしてカルヴァンだけが、この宣教への熱意を共有できたのである。カルヴァンとブツァーは、世界をキリスト教化することを目指した⁷²。彼らにとって、宗教改革こそが宣教だったのである⁷³。

近代の世界宣教運動が始まるずっと前から、“キリスト教化した”ヨーロッパを背景に、ブツァーは、失われた羊を尋ね出そうと繰り返し牧師たちを駆り立てていた。異邦人に働きかけようとする使徒の召しや命令のような口ぶりである。ブツァーは、人々をキリストとの交わりに招くために牧師はできる限りのことをすべきだと主張した。彼が自分に委ねられた人々に対して重荷を強く感じていた様子から、他の牧師たちも触発されて、「誰に対しても簡単にあきらめる」ことのないようになった。それでブツァーは、主な宗教改革者の中でも最も宣教意識の高い人と言われるようになったのである。神の選びは人間にはわからないからといって、宣教命令はいささかも制限されない、とブツァーは繰り返し強調した。「主はわれわれに選びの奥義を開示しようとはなさらずに、むしろ『全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を述べ伝えよ』と命じたもう。主は『全世界に』『すべての造られた者に』と言われる。実際、すべての人が神によって造られた神の被造物なのだから、われわれにとってその言葉は彼らを永遠の生命に招き入れるために誠心誠意たずね求めなければならない十分な理由となる」⁷⁴と。明らかに、ブツァーにとって宣教は、教会の牧会的働きの構成要素なのである⁷⁵。

以上のような内容に照らし合わせると、カルヴァンがシュトラスブルクでの至福の3年間の後に(1541年末に)ブツァーに後押しされてジュネーブに戻ったこと自体が、彼の宣教意識の高さを証している⁷⁶。カルヴァンのエキュメニカルな展望に刺激を受け、ジュネーブは世界中に福音を広める拠点となった。カルヴァンの宣教への熱心と伝道の勢いについては、この20～30年の間にたくさんの著者

⁶⁹ Willem Balke, Jan C. Klok and Willem van 't Spijker, *Johannes Calvijn: zijn leven, zijn werk* (Kampen: Uitgeverij Kok, 2008), 117 参照。

⁷⁰ この点に関して、とりわけカルヴァンがブツァーから受けた影響について、Elsie Anne McKee, *John Calvin on the Diaconate and Liturgical Almsgiving* (Vol. 197, Genève: Librairie Droz, 1984), 13, 129, 153, 179, 185-204 を見よ。

⁷¹ Benoit, “Calvijn,” 171参照。Thomas Schirmacher, *Calvin and World Mission* (Hamburg: BoD Verlag, 2009), 10-11 も参照。

⁷² Schirmacher, “Advocate of Love,” 65-67 参照。

⁷³ Scott, H. Hendrix, *Recultivating the Vineyard. The Reformation Agendas of Christianization* (Louisville: Westminster John Knox, 2004), 86 参照。

⁷⁴ 南純訳、『牧会論』（『宗教改革著作集』6巻所収）、121頁参照。

⁷⁵ Schirmacher, “Advocate of Love,” 66 参照。

⁷⁶ Gordon, “Calvin,” 86 参照。ストーフェール『人間カルヴァン』99-100も参照：ストーフェールは1540年7月頃の出来事を興味深く描いてくれる。「[ジュネーブの]牧師たちの働きに不満な市当局者は…カルヴァンを呼び戻すために動き始めた。ストラスブルクで幸福に暮らしていたこの宗教改革者は、ジュネーブに帰る希望を全然もっていなかった。彼はファレルに『この十字架で死ぬよりも、他のところで百回死ぬ』方がましだとはっきり述べていた。最初の教区から侮辱を受けて追放されたのですから、その聖職に再び就任してほしいという召喚を彼は尊大な態度で辞退することもできたであろう。しかし、カルヴァンは福音の益になることに関して、彼自身の恨みを育てるような人ではなかった」。

が再び指摘している⁷⁷。カルヴァンが宣教活動に個人的に関心を示し、積極的に関わっていたことが、説得力をもって証明された⁷⁸。

カルヴァンは、福音宣教やキリスト者の証は、訓練を受けた牧師だけがすべきことではなく、信徒たちにもそれをすべき責任がある、という信念を持っていた。彼はまた、キリストの福音が世界中で前進するために、キリスト者は常日頃から祈るべきだと確信していた。カルヴァンがジュネーブで用いていた毎週の礼拝式文の牧会祈祷にも、この宣教的関心が反映されていた。このように、カルヴァンは、世界中にキリストの福音が前進していくことについて常日頃から説教し、またそのために祈っていた。

しかし、彼は実際にどのように宣教に関わっていたのだろうか。カルヴァンの宣教の熱意の焦点はフランスにあり、またその他のヨーロッパにもある程度の関心があった。彼の影響の下、およそ 220 人の改革派牧師が密かにフランスへと送り込まれ、教会を立ち上げ、フランス王国の町や村で伝道にあたった。その内の少なくとも 10 人が逮捕され、プロテスタントの殉教者として命を落とした⁷⁹。しかし最終的には、いわゆる牧師の仲間たちによる宣教師運動は大成功だった。最大に見積もって、1555～1570 年の間に約 1,240 ものプロテスタント教会をカトリック教国フランス内に建てたからである。その多くがジュネーブからの宣教師によるものだった⁸⁰。さらに、カルヴァンは海外宣教事業の一つ、ブラジルへの宣教にも関わっていたのである。

カルヴァン自身の言葉にこうある。「神は全世界を 遜へりくだらせることによって御国を打ち建てたもう…神が世界の全地から教会を集め、その数を拡大増加し、賜物を豊かに与え、彼らの内に正しい秩序を確立されることが日々なされるように、私たちは祈り求めるべきである」⁸¹と。

X. 最後に

この論文では、マルティン・ブツァーやジャン・カルヴァンの牧会ケアへの献身的アプローチと宣教への熱意は、今なお唆に富み意味があると言えるだろうか、という問題を扱った。現代の私たちの牧会的働きや文脈における新しい問題を考える上で、ここから何を学ぶことができるだろうか。今日私たちが行う牧師の神学教育にとって、これらの宗教改革者たちの実践を必ずしも真似る必要はない。しかし、わたしが見たところ、彼らの牧会の精神と熱意について改めて再評価することから私たちが得られるものがあると思う。そうすることで、私たちは宗教改革に連なる歴史の一部となり、その遺産を批判的に検討することで常に改革し続けることができる。それが、私たちの未来のアイデンティティを根本から形作るのだからである。

⁷⁷ Joel Beeke, “Calvin’s evangelism,” *Mid-America Journal of Theology* 15 (2004): 82 によると「カルヴァンが書いた宣教に関する著書はほとんど存在しない。しかし、彼の『綱要』、聖書注解書、諸々の手紙そして彼の人生も宣教的・伝道的な精神に輝いている。ジャン・カルヴァンは主イエス・キリストの御国を地の果てまで広げようとした。そしてそれに合わせて伝道に対する熱心さを持っていたことはなおさらです」。Scott J. Simmons, *John Calvin and Missions: A Historical Study* (A place for truth studies, 2002), 200 も参照。W. Stanford Reid, “Calvin’s Geneva: A Missionary Centre,” *The Reformed Theological Review* XLII, no. 3 (Sept-Dec) (1983): 65-74 を見よ。また、Hendrik Bergema, “De betekenis van Calvijn voor de Zending en de Missiologie,” in *Opnieuw Calvijn: Verzameling Nederlandse Calvijnstudies (Deel 1)*, eds. William den Boer and Herman J. Selderhuis (Appeldoorn: Instituut voor Reformatieonderzoek, 2009), 159-160 ; J. Douglas MacMillan, “Calvin, Geneva, and Christian Mission,” *Reformed Theological Journal*, vol. 5 (1989): 5-17 ; David McKay, “The Missionary Zeal of Calvin,” *Lux Mundi* 27, no. 4 (Dec) (2008): 83-89 も参照。

⁷⁸ 例えば、Michael A. Haykin and C. Jeffrey Robinson Sr., *To the Ends of the Earth: Calvin’s Missional Vision and Legacy* (Crossway, 2014) を見よ。

⁷⁹ 「しかし、フランスにあるキリストの教会の改革のために、彼らはそのような危険性に勇気と使命感をもって直面しようとした。」Robert M. Kingdon, *Geneva and the Coming of the Wars of Religion in France, 1555-1563* (Librairie Droz S.A., 2007 (最初出版 1967 年), 127 参照。

⁸⁰ Scott M. Manetsch, “The Institutes and More: Calvin’s Theology” (unpublished paper delivered at the Gospel Coalition in April 2017) 参照。Kingdon, “Geneva,” 79-90 と Hendrix, “Recultivating”, xvii も参照。

⁸¹ 『綱要』改訳版、邦訳 409 頁 (第 3 篇 20 章 42 節) 参照。

より深い考察が可能な、いくつかの主な見解を以下に挙げる。いずれも私たちにチャレンジを与え、励ますものである。

- ブツァーとカルヴァンは、自分たちに委ねられた人々を誠心誠意世話した。彼らは、牧会ケアの実践を働きの中で優先順位のとて高いものとしていた。知的にも学問的にも優れていたが、人々に対して愛情深く、繊細に、憐れみ深くケアすることを軽んじることはなかった⁸²。神の羊の群れの牧師としての彼らの高潔さと忠実さには、私たちを鼓舞するものがある。
- 牧会の手本としての彼らの姿勢は、牧師や一般の信徒でケアを担う人々が何に注目すべきかについて、洞察を深めさせてくれる。信仰共同体として教会全体を牧会的にケアしつつ、個人へのケアのニーズにも眼を留めるバランス感覚は、非常に重要である。この点は、世俗化する社会にある私たちの文脈においても、いま一度統一される必要がある。
- 現代からすると、彼らの牧会的働きや規律には干渉し過ぎのように感じられるものもあるかも知れない。しかし歴史的な文脈を考え、またそれらがすべての人の霊的健全さや成長のためであったことを思うと、新しい視座が得られる。
- 神の言葉としての権威を持つ聖書が、宗教改革の中心的役割を果たしたことは疑いようがない。霊的改革と聖書の告知は密接に関係していた。それゆえ、説教はまさに牧会ケアを実践するための重要な手段と見なされた。しかし、それだけにはとどまらない。ブツァーとカルヴァンは実践的に取り組み、日曜日の教会堂の中に限らず、人々の差し迫った生活の文脈において、彼らのニーズに応えていた。
- 彼らは牧会的働きにおける説明責任（アカウントビリティ）や同僚との協調性に、重きを置いていた。彼らは牧会の働きにおいては上下のないパートナーでありながら、キリストの権威のもと、お互いの牧会について指導し合っていた。彼らはお互いに相手を頼りながら、また同時に相手に従順だった。私たちの同僚との関係においても、彼らのやり方から学べることはあるだろう。
- 彼らのキリスト教宣教の働きは複雑多様な業だった。牧師として重労働と重圧、経済的困窮や絶え間ない外からの批判、無関心な会衆、そして時には身体的に危険な目に遭うなど、たくさんの困難に遭遇した。このことから、私たちが困難の中にあって耐え忍ぶことを教えられる。
- 手紙を書くことは、とりわけカルヴァンによって、牧会ケアの一つの形として効果的に用いられた⁸³。孤立感と疎外感が深刻化するソーシャルメディアの蔓延する世界において、手書きのカードや手紙は、予期せぬ形で人々の心の琴線に触れるかも知れない。
- 牧会的対話とケアを行う関係性の中で、彼らがキリストとの結合や聖霊の働きに焦点を当てていたのは意義深いことである。彼らは、心理学的洞察やスキルの必要性を否定することなく、明確にキリスト教的視点に立つ霊的導き手として振る舞った。
- ブツァーが意識的に強調した、すべての信徒が牧会ケアを行う責任があるという点は、現代にも通じる問題である⁸⁴。言い換えれば、牧会ケアとは、牧師によって信仰共同体に対してなされるだけでなく、キリストとの交わりの中にある共同体を通して、キリストの体となるすべての信仰者によってなされるもの（まさに相互牧会ケア）なのである。
- ブツァーとカルヴァンの指導の下、シュトラスブルクとジュネーブの教会が表したホスピタリティと執事的活動は良く知られている。自然災害が増え、移民・難民の危機が高まり、新しいディアスポラが世界規模で起きている時代に、このケアという宣教的働きが私たちにチャレンジを与える。各個教会という境界線を越えて、すべての人をキリストとの交わりに招くのである。

⁸² Schirmacher は、ブツァーを愛の擁護者として定義する（Schirmacher, “Advocate of Love,” 参照）。

⁸³ Warfield はカルヴァンを「改革時代の偉大な手紙作者」と呼んでいる。B. B. Warfield, *Calvin and Augustine*, (Philadelphia: The Presbyterian and Reformed Publishing Company, 1956), 14 参照。

⁸⁴ Schirmacher, “Advocate of Love,” 34 参照。

- カルヴァンの苦難に対する牧会的アプローチを学ぶと、ほんとうに苦難が、新しい人生を歩み始めること、新しい目的意識を持つことへと導く、ということがわかった。つまり、苦難は成長の過程、生きる意味を見つける過程とみなすことができるということである。それがもたらす危機に加え、苦難は、神と隣人とに対して意味のある奉仕を捧げる機会になり得るのである。キリストとの結合において被る苦難であるというカルヴァンの理解によって、今日を生きるキリスト者の我々が新たに心に留めるべき有意義な思考だと確信している。
- 今なお生きておられるキリストの福音を人々と分かち合いたいという、カルヴァンとブツァーの熱意は、ケアという牧会的働きを基礎を形作った。牧会ケアが神の教会にとって宣教の核であること、すなわち、牧会ケアを通して宣教するという理解が、私たちに突き付けられている。そしてまた、全人的に人々をケアすることも思い起こさせられる。全人的、つまり、体と魂と心のすべてが神と隣人との関係の中に置かれていると考えるのである。

国際情勢（戦争など）の不安定な日本社会において牧会をしていく今日、牧会神学・牧会ケアに関する古典的な文献、特にブツァーやカルヴァンの文献を読み返すことで、牧会的働きの目的について健全かつ批判的な考えを生み出すことができると信じている。今日の教会を取り巻く状況は色々な困難を抱えている。現代社会の急速かつ著しい変化と多種多様な価値観のもとで、日本の教会の多くは教勢の停滞や後退、会員の高齢化、経済的困難、牧師志願者の減少など、存在の土台を揺るがすようないくつもの問題に直面している。そして、このような現実のもとで教会は自らの存在の根拠と使命をあらためて問い直し、この時代と世界の中で福音を証する信仰共同体として、日々新たに形成され続けていくことが求められている。

新たな時代のもとで、かつては意識されていなかった新しい牧師観や課題が生まれてくることもある。「牧師とは何ものなのか」、「牧師は何をするためにそこにいるのか」、という問はつねに新たに吟味され、批判的に見つめ直されていかなければならない。この論文はこのような問いに、宗教改革者たちの牧会的宣教の業を通して応答しようとする試みである。